

1. はじめに

琉球大学附属図書館では、現在、伊藤伊の図書館業務システムを利用して図書館業務を行っている。昨今の図書館業務システムの状況を見ると、学術情報センターでは、新CATシステムの導入に向け動いており、既に、いくつかの大学図書館では、同システムが稼動しているようである。琉球大学附属図書館では、次の電算機機種更新が、平成12年2月と迫っているが、新CATに向けての組織的な検討の動きが未だなく、立ち後れているのが現状である。

そこで、学術情報センターで、いくつかのメーカーが開発した新CATシステムを見せていただいたので、それを参考に、私個人が考える望ましい新CATシステムについて考察し、それを琉球大学附属図書館の次期システムにどう活かすかを考えたい。

2. 新CATシステムをめざして

2.1. 方針

まず最初に、新システムを導入するに当たって、どのような方針を持って臨めばより良いシステムが構築できるのか意見を述べたい。

画面の一覧性を重視する

画面をレイアウトする際、なるべく上下左右にスクロールしなくてもより多くの項目が、できれば全項目が見られるようにし、更に、画面の展開も少なくするように工夫すべきである。それは、マウスでの無駄な操作を少なくして、作業の手間を省くとともに、瞬時に多くの情報を画面から読み取ることができるからである。

データの入力は一度で済ませる

同じデータの入力は、一度で済むようなシステムを構築すべきである。それは、仕事の手間を省くことになる。

データを有効に利用する

入力されたデータは、最大限利用して、検索、閲覧、会計、統計・帳票出力等に有効に利用すべきである。

作業の意味、流れを理解できるシステム作り

画面の構成を簡素なものにして、項目名などを見やすくする工夫も大切であるが、あまりにも独自のものにこだわり、担当者以外や他の機関の者には、容易には理解できなかったり、誤解を与えるようなシステムでは困る。また、担当者にも常に、何のために、何をやっているのかを意識させ、理解させるようなシステムでなければならない。つまり、誰にでも、何をやっているのかが容易に理解できて、それが何に利用されているのかが理解できるシステム作りが大切である。

2.2. 目録作成システム

2.2.1. 項目名について

項目名について考える場合、現実的な方法として二つの考え方がある。一つは、項目名を誰にでも分かるような簡単な日本語で表示することであり、もう一つは、従来から見慣れている学情のアルファベットの項目名で表示することである。

項目名が、簡単な日本語で表示されている場合は、見やすいし、項目に入力すべき内容がすぐにわかるというメリットがある。しかし、全国的に統一されたものではないので、他館では、違う項目名で呼ばれる可能性が高く、その項目名の呼び方しか記憶していなければ、他とのコミュニケーションが取りにくくなる可能性がある。

また、学情のアルファベットの項目名で表示されている場合は、慣れていなければ、その項目名の場所には、何を入力すべきかわかりづらいというデメリットがある。しかし、それは学情を通して全国的に知られた項目名なので、他館とのコミュニケーションは取りやすい。

どちらが良いのか、意見が分かれるところではあるが、私個人の意見では、後者の学情のアルファベット方式の方が良いと思う。

それは、まず第一に、目録作成者は、目録作成業務に慣れていなければ仕事が難しいので、人事異動でもなければ、全くの未経験者が、作業をすることは恐らく無いと思うので、学情の項目名とその意味をほとんどの者が理解していると思われるからである。

第二点に、全国的に統一された項目名を理解していれば、他館との間で問題点についての意見交換や書誌調整の話がしやすいからである。

以上の観点から、項目名は学情のアルファベット方式の方が望ましいのではないだろうか。

2.2.2. 記述方法について

記述の方法について考える場合も、二つの考え方があると思う。一つは、タイトル、著者、出版者、出版地、出版年等をばらばらにしてそれぞれ個別のフィールドに入力して、学情に送信し、ローカル側に登録する方法と、もう一つは、従来のように最初から学情の記述文法に従って各フィールドに入力して、学情に送信し、ローカル側に登録する方法である。

まず、それぞれ個別のフィールドに入力する方法について考えたい。この方法では、それぞれの情報を最小単位で個別に入力するので、区切り記号を付けるなど、標目系の記述文法を覚える必要がないので、目録担当者は、記述文法にあまり精通していなくても目録を作成することができそうである。更に、作成時間も短縮できそうである。

また、もう一つの方法は、従来学情の目録データベースへの目録作成と同じやり方である。この方法では、目録担当者は、記述文法にある程度精通していなければならない。

前者の方法だと、目録担当者は、図書館司書にこだわる必要も無く、一般事務職員でも、少し慣れれば容易に目録を作成できそうであるが、目録規則をあまり知らない図書館員が増える恐れがある。後者の方法だと記述文法を覚えるまで時間はかかるが、図書館員としての基本的な目録規則を容易に身につけることができる。どちらの方法が良いのか？ 項目名の章で述べた結論から言えば、後者の方法が望ましいのだが、便利な前者の方法も捨

て難い。この問題はいろいろな要素がからんでくるので、すぐには結論を出すことができないので、今後の研究課題としたい。

2.2.3. アップロードについて

アップロードについて考える場合、図書と雑誌では事情が違うので、分けて考察する事にしたい。

図書

図書の所蔵レコードのアップロードのシステムを考えた場合、如何に学情書誌への同定率をアップさせるかが鍵である。書誌を同定させる方法として、以下に書く第一キーと第二キーを使った方法が、私個人の考え得る最良のものなので紹介したい。

書誌を同定させる為のキーとしてまず第一に、ISBN が考えられる。そこで、まず最初に、ISBN だけで書誌を検索させる。これで、最近出版された図書の多くがヒットするはずである。

しかし、ご存知の通り、ISBN は全ての図書に付いているわけではないので、第二の検索キーが必要となってくる。どのような使い方をするかというと、電算機に、まず最初に第一キーの ISBN で検索をさせ、それでヒットしなければ、次に、第二の検索キーで再度検索させるという方法をとるのである。

ISBN は、基本的に一意のキーであるが、その他のキーはそうではない。そこで、第二のキーとして、幾つかの項目を組み合わせる方法が考えられる。その案として、書名、著者名、出版者、出版年の組み合わせで、書名は先頭から 20 バイト位まで（前方一致）、著者は姓だけ、出版者は 20 バイト位まで（前方一致）、出版年は全部を入力して、4つの項目の組み合わせで検索させてみてはどうだろうか。書名と出版者を途中で切ったのは、入力の手間を省く為であり、著者を姓だけにしたのは、標目系の入力のゆれを防ぐ為である。

以上書いた事は、アップロードを行うのなら、どういう方法が良いかと考察しただけであり、アップロードを自館で行うべきか否かという事とは違う。先に書いた方法を行ったとしても、100%の同定率を得る事は不可能であり、また、電算機が同定しても、これも100%信用するわけにはいかない。書誌の記述内容なら 100%完璧でなくとも許されるかもしれないが、所在情報の間違いは、どうしても防がないといけなない。そうなると、結局電算機の自動同定が正しいかどうかを、人間が判定しないといけなくなる。また、第一キーと第二キーを入力する時間も結構かかる。それは、アップロードの目的である業務の手間と時間を省くという事に反する。しかし、ここで結論を出すのは早急過ぎるので、今後の研究課題としたい。

雑誌

雑誌の所蔵レコードのアップロードを考えた場合、図書の場合と少し事情が違うように思われる。図書の場合と同じように ISSN やキーワードを利用する方法もあるが、雑誌の場合、年度内は、受け入れ種類がほぼ同じであるので、学情の書誌 ID をキーにしてアップロードを行ってはどうだろうか。その方法だと 100%確実である。自館の受け入れている雑誌の学情 ID を調べる方法は、個別版を入手したり、その他にも方法が有りそうで、比較的簡単だと思われる。

雑誌の場合問題なのは、ローカル側の所蔵情報の学情形式（ある巻表示）への自動変換である。琉大図書館では、数年前から、雑誌の受け付けレコードから自動的に、ある巻形式への所蔵情報の変換ができるように業者に要請しているのだが、欠号をバックナンバーで受け入れした場合の、ある巻表示へ組み込むロジックが難しいとの事で、未だに実現していない。しかし、受け付けレコードからある巻形式への自動変換ができていた大学もあるようなので、これは是非実現させたい。

このように、雑誌の場合は、図書の場合と違い、書誌の同定が確実であり、ローカル側の所蔵情報のある巻形式への自動変換の問題さえ解決すれば、比較的簡単にアップロードが実現できそうであるので、そういうシステムの構築をめざすべきであろう。そうすれば、学情の所蔵データベースにも比較的最新の情報を提供できる事になる。

2.2.4. 典拠ファイルについて

琉大図書館の現在のローカルシステムには、取り引き業者、学部・学科・講座、教官、学生等のファイルは有るのだが、本格的な典拠ファイルと呼べるようなファイルは無い。しかしながら、充実した典拠ファイルを持つことは、データの参照が容易になるし、リンクを張る事でレコード間を有機的に結ぶこともできるので、業務の軽減につながる事になる。取り分け、検索業務には威力を発揮すると思われる。次期システムでは是非充実した典拠ファイルを持つシステムを構築したい。

次期システムで必要と思われる典拠ファイルは、著者名、出版者名、予算管理の三つが今のところ考えられる。

この内、著者名典拠ファイルは、学情の書誌をローカル側へダウンロードする際、著者名リンクをたどって、著者名典拠データベースのレコードを自動的にローカル側へダウンロードして作成できないか工夫したい。

また、出版者名典拠ファイルは、同じく書誌の中から自動的に出版者を切り出してファイルを作成できそうである。

予算管理典拠ファイルは、予算を持つ学部、学科、講座、教官のそれぞれの単位を統括して、コード、名前、所属等を一組のレコードにしたファイルである。図書の所蔵レコードからリンクして、求めに応じて各々の図書の購入状況一覧が作成できるようにしたい。これは、学情側のファイルからデータは得られないので、自館で工夫して作成したい。

2.2.5. リンクに形成について

システムを構築する際、データの作成、取り込みと共に非常に重要になってくるのが、上手なリンクの形成である。リンクを上手に張る事によって、無駄な操作を少なくして、画面の展開がスムーズかつ合理的に行えるようになり、結果として業務担当者や利用者のストレスを軽減し、面白ささえ与える事もできるかもしれない。このリンクを形成するシステムを構築する際、重要な事を二つ以下に書いてみたい。

リンクを形成する際、重要な事の一つは、リンクの形成は、なるべく電算機に自動的にさせるという事である。これを担当者に手動でさせるとなると、かなりの業務の負荷になり、ストレスを増大させる事になる。それを避ける為の一つの方法として、以下の事が考えられる。学情の書誌と所蔵情報をローカルのデータベースへダウンロードする際、親書

誌と子書誌、書誌と所蔵間のそれぞれのリンクを自動的に張らせ、所定のファイルへ格納する事、更に、典拠ファイルへ格納するデータが有れば、それも自動的にリンクを張って作成させるようにする事である。

リンクを形成する際、もう一つ重要な事は、リンク先をたどる場合、コマンドを使ってたどる事もできるし、その項目をクリックしてもたどる事ができるようにする事である。それは、www のブラウザで、青くなっている項目が有って、それをクリックすれば、リンク先へ行けるのと同じイメージである。そうすれば、担当者や利用者は、コマンドを入力する煩わしさも無く、簡単にリンク先へ行ったり、戻ったりする事ができる。

2.2.6. ガイドについて

業務の軽減を考える場合、画面でデータを入力する際、ガイドが充実しているかどうか重要な要素の一つである。だから、オリジナルで入力する項目以外は、単語であれ、パラメーターであれ、極力ガイドを付け参照できるようにしたい。更に、膨大な量のデータを持つファイルであれば、検索して捜せるようなシステムができれば良いのだが、可能だろうか。同時にヘルプ機能も充実させ、冊子体になっているマニュアルをその画面毎に参照できるようにすればとても良いと思う。

2.2.7. 画面の構成について

書誌検索画面

・学情検索画面

学情の検索画面は、一覧性を重視して従来のように各検索項目が一画面で表示できるようにし、更に、見やすいように枠の中に入力できるようにした方が良い。

・ローカル検索画面

ローカルの検索画面は、一画面で表示できる事も重要だが、見やすさを重視して無駄を省く為に、検索項目を学情より減らして、一行毎の枠に各検索フィールドを設定した方が良い。検索項目は、書誌から書名、著者名、出版者、出版年、件名、ISBN、ISSN、所蔵から請求記号、Book-ID、物品管理番号などの 10 件程度で良いかと思われる。

書誌簡略表示画面

・学情簡略画面

学情の簡略表示画面は、一覧性を重視して、二行程度の表示にしておき、それ以上の情報が必要な時に、全表示が選択できるようなシステムが良い。しかし、業者の話では、枠の中に表示させる場合、レコードの長さを意識して枠の行数を増減させる事は、技術的に非常に難しいとの事である。それでもやはり実現して欲しいものである。

・ローカル簡略画面

学情の簡略表示画面と同じ項目、同じ表示方法で良いと思う。

書誌詳細表示画面

・学情詳細表示画面

ここでもやはり一覧性を重視して、従来 of 学情の画面と同じような構成にして、枠を設けて長いフィールドでも一行で表示するようにする。ただし、枠の外に隠れたデータを見る時には、全表示を選択して書誌レコードの全データを表示するようにする。

- ・ローカル詳細表示画面

学情の詳細表示画面と同じ項目、同じ表示方法が良いと思う。

書誌入力画面

- ・学情書誌入力画面

枠を設けてデータ表示する場合は、フィールドの長さを自由に調節できないようである。だから、そこにデータを入力した場合、どうしても隠れて見えなくなる部分が出てくることが予想される。そうすると、レコード全体を眺めて間違いが無いか確かめる事ができなくなるし、ヨミなどを入力する時に非常に不便である。そういう事情からすると、入力画面は、しばらくの間従来のようにラインモードに近い形式で入力した方が良いと思われる。ただし、書誌詳細画面から編集しようとする場合は、クリックして入力画面に変わるような設計にしたい。

- ・ローカル書誌入力画面

学情書誌入力画面と同じ構成が良いと思う。

所蔵入力画面

- ・学情所蔵入力画面

基本的にローカルの所蔵画面と同じ構成にする。ローカル側での必要な項目を全て入力し、自動的に必要な項目だけを学情に送信し、同時にローカル側のデータベースにも格納する。

- ・ローカル所蔵入力画面

学情への所蔵入力画面と同じ構成が良いと思う。

3. おわりに

以上、幾つかのメーカーが開発した新CATシステムを見て、その優れた部分を参考にして、自分なりに自館の次期新CATシステムはどうあるべきかを考察した。当然の事ながら、誤解や間違いも多々あるかとは思いますが、これをベースにして情報を集め、研究をして、微力ながら優れたシステムの構築に役立ちたいと思う。